

### 岡山・牛窓での農業者支援活動開始

国際耕種は AAI ニュース 61 号から「日本農業の今と国際耕種の関わり方」というテーマで、今後の国際耕種の国内農業との関わりを深めるべくシリーズを組んだ。この中で、海外での農業・農村開発への我々の取り組みの一方で進行しつつある国内農業の生産現場が抱えている課題や日本農業の今後進むべき方向性などを事例紹介しながらブレインストーミングを行い、国内農業現場からの知見の発掘、海外支援への活用、国際耕種の日本農業への関わり方や可能性を探ってきた。

国際耕種の日本農業への関わり方の一環として、地域生産者グループの活動と地域連携の試みを、シリーズでも紹介した岡山県瀬戸内市牛窓の農家と検討してきた。牛窓地区は他の農村地帯と同じように、後継者・高齢化問題、耕作放棄地の拡大が進んでいる。一方で、若手就農者の参入もあり、このような牛窓の農家を訪問し農業体験をすると同時に、その中で論議された地域農業の課題の聞き取りなどを行ってきた。また、このような活動の一助になったのは、昨年、一昨年に続き実施された「本気で農業を語るシンポジウム」(主催:農業の未来を拓く会)への参加である。

シンポジウムは表題のように、農業に関わる各方面の意見を出し合い、それを論議していこうというものである。今年のシンポジウムも牛窓の千手山弘法寺遍明院の境内を借りて開催された。今年のテーマは「後継者・新規就農者問題について」であった。シンポジウムは農業者、学生・教員、普及員、行政関係者、企業など多方面から 60 名程度の参加者のもとに、若手就農者、学生、研究者、企業からの発表とその後の質疑応答という形式で実施された。農業者(新規就農者)からは就農にあたっての動機や現業の状況、学生からは農業政策、溜池利用への地域関与、学生の就農意識に関する研究報告、また研究者からは現在の農政の課題や農業へのメディア利用

について、さらに企業からは新規農業分野への参入への取り組みの状況などの報告がなされ、論議された。特に若手農家の就農にあたっての動機、心意気、苦労話など現実的な報告が行われた。また、参加学生の多くはシンポジウムに先駆けて当該地域で実施された農家研修に参加していたこともあり、農作業の苦労と面白さ、職業としての将来の就農の可能性への話も出された。

ところで、当該地での活動は AAI ニュース(第 45 号 1 ページ、第 63 号 3 ページ)でも報告してきたが、国際耕種の牛窓での地域連携の試みを支援してくれたのは、当地で有機野菜生産を行っている元国際耕種社員である。彼や彼の仲間達との交流、そしてシンポジウム参加の成果として、国際耕種は牛窓に研修所“Ayn”を「農業の未来を拓く会」と共同で設置した。“Ayn”は宿泊(2 室)が出来るほか、倉庫もある。会議室にはコンピューターをはじめとしたプレゼン用プロジェクターを設置した。溜池のほとりにあり、町中からはちょっと離れているが、周囲には田畑が広がっている。“Ayn”は、地域農業者の会議や懇談の場、農家研修に参加する人たちのための宿泊施設として活用してもらうとともに、我々の国内活動の拠点としていこうと考えている。既に何名かの大学生の農業体験研修の宿泊・講義用に活用されてきており、今後も施設の充実を行いながら地域との交流を進めていきたい。

牛窓研修所“Ayn”の設置は、国際耕種にとっては新しい活動のきっかけであり、かつこれまでの日本の農業に関わる接点としての論議の一つの成果と考えている。実際の農業現場に関わることの少ない我々にとって、この研修所の活用を通して、より現実的に日本農業へ接触するきっかけとともに、我々自身の研修、農家との交流、そして日本農業が抱えている課題を考える場として継続的に利用することが重要と考える。活動としては小さい第 1 歩ではあるが、我々にとっては今後の大きな 1 歩のステップにしていきたい。



牛窓研修所“Ayn” (左上は“Ayn”のロゴ)

研修所“Ayn”の施設内

「本気で農業を語るシンポジウム」会場